

---

# 『一塵の獣』

海。

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

『一塵の獣』

### 【Nコード】

N4267T

### 【作者名】

海。

### 【あらすじ】

“BD”、それは現在、東京で拡散している新型ドラッグ。

それは、小さなカプセル状で中には一塵（十億分の一）の獣が潜む。依存性はなく、健康被害もなく、その獣は服用者に“夢”を叶える力を与えてくれる。

しかし、その代償は人間という規格から外れることだった。

【一・植田亜姫 - Aki Ueda -】

【一・植田亜姫 - Aki Ueda -】

少女は屋上への出入り口、その屋根の上へと腰を降ろす。長時間、真夏の太陽の下に晒されていた場所だ。ストッキングと下着越しでも十分に熱いだろう。けれども、彼女は意にも介さない様子で、どっかりと、その高熱のコンクリートの上に胡坐をかいた。

頬杖を付いて眼下を見下ろす。ここでは数名の男子生徒が殴りあっていた。炎天下の中、お互いに汗を散らしている。彼女、そして彼等の通っている、この高校は決してレベルの高い学校ではない。頻繁とは言えないにせよ、このようなことは、時々あることだった。ただ、普段とは違うのは、その人数差だろうか。先ほどは殴り合っている、としたが、その殴り合いは一人対複数名で行われている。更に付け加えるなら、実に面白いことに複数名に対して、一人が圧倒的に優勢だった。それは、人数にしてはよく応戦しているとか、そういうレベルではなく、人数の差があるにも関わらず一人の男が、複数名をほぼ一方的に殴り倒しているのだ。

そして、その男の存在こそ、少女が、この炎天下の中で、この生徒間の喧嘩を観戦するに至る最たる理由だった。

少女は、姿勢を変えることもなく、ただ、孤軍奮闘する、金髪の大男を眺める。

身の丈2m近くはありそうだった。体の大きさは、そのまま強さに直結するだろう。けれども、それだけでは言い表せないほどの力強さ。

「あんま、くだらねえことしてんな」

最後の一人が地に這いずるのを確認してから、大男は、そう、相

手に言い聞かせた。

そして、気が付く。乱闘が行われていた僅かに奥。フェンスに身を預けている気の弱そうな少年の姿を。制服が乱れているところから、事の発端が容易に想像できた。

倒れる男たちは、それ程の余力も残されていないのか、頷くこともせず、ただただその場にひれ伏し続ける。

「行くか」

大男は、そう言って、ボロボロの少年の手を握った。そして、彼を起き上がらせると、振り返ることなく、少女の真下を抜け、校舎へと帰っていく。

ひれ伏す男たちを尻目に、立ち去るその男の姿は、宛ら王の様だった。

「へえ」

そこで、初めて少女は口を開く。立ち上がって、自身のスカートに付いた砂埃を払った。

スカートを押さえ、屋根から、屋上へと飛び降りる。軽く、屈伸して、衝撃を逃がすと、何事もなかったかのように立ち上がった。

彼女の飛び降りた高さは、ぎりぎり、3mない程度。

そして、少女は王様の作った惨状を目に焼き付けるように屋上側を向き、そのまま、後ろ手に扉を開いた。

「意外。けれど」

彼女が、校舎へと消えると、重たい鉄の扉が、軋んだ音を立てて外界を遮断した。

「関係ないか」

【一・諏訪部悠 - Haruka Suwabe -】

【二・諏訪部悠 - Haruka Suwabe -】

つい、先ほど、人を殴った影響か。両の拳が酷く痛んだ。見るまでもなく、出血し、皮膚がズル剥けている事が容易に想像できる。現在は保健室。この拳を代償に救出した啓太の怪我の手当てをしてもらっていた。

怪我自体は、大したことないだろう。主だった外傷は、肘と頬にできた擦り傷くらいか。

まあ、そんな怪我でも消毒液は勿論、容赦ない痛みを浴びせる。彼の背に立つ形になるので、表情を窺い知ることはできないが、数少ない、友人が苦悶の表情を浮べているのは間違いなかった。

俺は、同じ目には合いたくないので、さりげなく、養護教諭に見えるないように、背中 of 辺りで手を組んでいる。

勿論、啓太をここに連れてきたのは、彼のことを思ってた。

「はい、これでお終い」

養護教諭が、啓太の肘に絆創膏を、頬にガーゼを貼り終えてそう言った。

啓太は、頬のガーゼに手を触れた後、小さく会釈をする。そして、ゆっくりと、立ち上がると、俺の背中を押して、養護教諭の前へと差し出した。

「ほら、悠も、手、見てもらわなきゃさ」

その時の啓太の笑顔を忘れまい、と、俺は心に誓い、甘んじて養護教諭へと両手を明け渡す。

あの、青と白の悪魔は、耐え難い激痛を俺へと与えた。

そして、俺は啓太を睨み、そして、両手に大げさに巻かれた包帯

を摩りながら、保健室をあとにする。

「ヤンキーに恐れられまくってる、諏訪部悠さんが消毒液ごときにみっともないなあ」

そう言って、啓太はケラケラと笑った。

「……うるせえ」

それに対して、俺はどうとも反論できずにそう口を尖らせるしかない。

辺りはもう、橙に染まり始めている。

元より、先の喧嘩が放課後だったのだから、今の季節でなかったら真っ暗でもおかしくなかっただろう。当然、教室等には人影はなく、二人の足音と、遠くのほうで響く吹奏楽部のラッパの音が耳につく。

教室に戻り、お互いに机の脇にかけてある鞆を肩へとかけた。

そして、下駄箱を通り、校舎を出る。

家の方向はほぼ一緒。学校では自転車通学が認められているものの、家が近いのと駐輪場の確保が難しいため、俺は徒歩での通学を好んでいた。啓太も同様。

昇降口から駐輪場までの距離が少しあるため、家までの距離が近かったら歩いたほうが楽、というのが二人の見解だ。

青から、オレンジへとグラデーションしていく空を眺めながら、ぼんやりと、サイクリングロードを歩く。

「なんで、お前さんは狙われやすいのかねえ」

俺は、そう、啓太に問いかけた。勿論、啓太自身、そんなことが判るわけないだろう。案の定、啓太からの返答は「さあ」というものの。

まあ、原因がわかっていても、どうにか対処できるようなものでもないのかもしれないが。

啓太は昔から、苛めの対象になりやすい性質<sup>タチ</sup>だった。昔から、体が大きかった俺が一緒にいることが多かったので、小、中学校くらいまでは、多少、それも形を潜めていた。けれども、高校に上がった

てからは、一人で呼び出されては、他の生徒の捌け口にされること  
が時折。

「悪いな、変なこと聞いてさ」

「いや、別に気にしないよ。それに悠には、いつも助けられてる。」

「そうか、な。まあ、任せろ。何時でも助けてやるからよっ」

そう言っつて、俺は笑った。それでも、尚、啓太の顔は翳ったまま  
だったけれど。

それから、しばらくは無言だった。淡々と歩いていくうちに、サ  
イクリングロードが途切れ、一般道へと変わる。そして、徐々に人  
通りの少ない道に。辺りが橙から灰色になっていった。

「ご飯でも食べてく？」

お互いの家への別れ道。古びたタバコ屋がある交差点の信号待ち  
でそう聞かれた。当然、帰るにはここで別れなければならぬのだ  
が、もう少し啓太の家の方まで歩いていけば、小さな食堂がある。

時間に余裕がある時は二人で、そこで、食事をしたりしていた。

「遠慮しとくわ。兄貴の飯も作らなきゃならねえし」

しかし、今回は断った。夜勤の兄がそろそろ起き出す時間である。  
残念ながら、今日は朝に準備をしてこなかったため、早く帰って食  
事を用意しなければならない。

「ああ、今日も健児さん夜勤なんだ。わかった、それじゃあ、また  
明日学校で。」

「うい」

啓太も長い付き合いだ。我が家の事情をある程度は把握してくれ  
ている。そうして、俺は啓太に小さく手を振ると、自宅へと歩みだ  
した。

### 【三・強襲 - first contact -】

#### 【三・強襲 - first contact -】

深夜。俺が作った食事を平らげ兄は職場へと向かう。それを見届けた俺は、自室に戻ると、特にやることもないので、部屋の片隅に詰まっていた雑誌を広げた。投げられ何度も何度も読み返されたそれは、既に、表紙はしわになり、何故つけたかも覚えていない折れ目までついている。そして、暑さを紛らわせるために足をパタパタ振りながら、読書にふけた。と言っても、それに飽きるまでに、然程の時間も必要ではなく、

「……暑い」

俺は、そう言って、持っていた雑誌を、普段同様再び、部屋の片隅へ投げる。雑誌はバサバサと開閉を繰り返した後、見事、先代たちの眠るエリアへと帰っていった。

俺の部屋には冷房器具の一切がない。周りを部屋に囲まれている部屋のため、エアコンは設置できず、窓もないから、風を通すことも適わない。拳句に、無理して使い倒した扇風機は先日ご臨終なされてしまった。よって、真夏の熱帯夜を越えるためには己の身包みを剥ぐと言っつぱいっつぱいの対策をねらなければならない。

「もう、無理。限界。」

しかし、俺の臨界点は突破してしまっていた。冷たいものが飲みたい。けれども冷蔵庫に何も無いことは自炊している自分が一番良くわかってる。

俺は、投げ捨ててあった白いTシャツと、ジャージのズボンに足を通すと、サンダルをペタペタと鳴らしながら家から出た。鍵をかけて、階段を下りる。そして、マンションの自動ドアを抜けて外へ。



風は、まだまだ温さが残っているものの昼間に比べれば、大分涼しい。さらに、吹き抜けるそれが、肌に纏わりつく汗を冷やしてくれるので、最高潮にあった俺の体温をいい感じに冷ましてくれる。

今は、どれ程の時間だったか。確認していた訳じゃないのではつきりとは言えないが、十時はまわっているだろう。けれど、普段は、それなりの人通りがある住宅街の道は、それを差し引いても、違和感が残るほどに、なぜか一切の人を見かけることも無かった。

暗い道。街灯の光が頼りなく揺れ、小さな虫達がそれに群がっている。

と、道路の真ん中。俺の正面に、こんな時間には似つかわしくない、小さな人影が見えた。家を出て初めて見かける人影でもある。近づくにつれて輪郭が露になっていく。どう見ても中学生くらいか。まあ、自分だつてまだ、高校生なのだから、こんな時間に出歩くのは褒められたものではないのだけれど。

そして、ほんの、1m程前まで来て、その人影が中学生だという認識を改めることとなった。それは、少女。真っ黒で艶やかなショートカットの髪の毛。何故だかはわからないが、黒いストッキングに包まれた両足を肩幅まで開き、仁王立ちしている。そして大きな両の瞳はこちらを睨み付けているようにも思えた。けれど、ここまでの、要因では、自身の認識を改めるには至らない。問題は彼女の格好。彼女が身を包むそれは、俺の通っている学校のものと同様のもの。そして、首元に垂れ下がるリボンも、彼女が自分よりも学年が一つ上だということを表していた。そして、より、不穏なのは、彼女が背負っているカバン。スクールバックともう一つ、彼女の身の丈と変わらないほどのゴルフバックを持っていたこと。部活動に詳しくはないものの、うちの学校にはゴルフ部なんて、なかったよう記憶している。学校帰りに打ちっぱなしに行くのが趣味なのかもしれないが、それでも、違和感は拭いきれなかった。

繰り返すが、少女は、俺の目の前に立っている。あまり、広い道でもなかったため、俺が進むには彼女を避けなければならぬ。

学校では評判の不良高校生とは言え、こんな、なんでもないところで、ましてや女相手に争いごとなんてしたくなかった。とくに、声をかけるでもなく、彼女の横を通り過ぎる。

とくに、何も無い。彼女も通り過ぎようとする俺を、引き止る、ということとはしなかった。

違和感は勘違い。彼女も彼女なりにこの辺りに用事があったのだろう。そう、自身を納得させつつも、ふと再び後ろを振り向いた。直後。

視界の片隅に映る黒い影。

咄嗟に体を横にそらし、その影を避けた。無理な体勢から無理な勢いで体を動かしたためにバランスを崩し、その少女の方向を向いて尻餅をつく。

と、同時に、重く低い音とともに、体に鈍い振動が響いた。

それは、すぐ右側。俺の体から僅かに離れたところに減り込んでいる。コンクリートの地面を砕き、存在を上書きするかのよう。地面へと突き刺さるハンマー。といっても、日曜大工に使うような一般的なサイズではない。柄の長さが1.5mを超える、大きなもの。軽く振ったって人の骨を折るくらいは容易だろう。それが、自分の頭の位置を軌道に含め、振り下ろされた。

俺は意味もわからず、ハンマーの頭、柄、そして、それを握る手を介して、そのハンマーの主を見上げる。言うまでもない。その場にいたのは俺ともう一人。

少女は小さく、舌打ちをすると、ハンマーを振り上げる。ぱらぱらと砕けたコンクリートがハンマーから落ちた。

「マジかよ」

少女の冷めた目が俺を見下ろす。

刹那の風きり音。

俺は、転がるようにそれを避ける。

再来する重音。来襲する衝撃。

再び、見上げた先にあった少女の顔は、けれども、先ほどと同様

変わらぬままだった。

常軌を逸している。率直にそう思った。今まで、何度も修羅場をくぐって来たつもりだ。複数のヤンキーに囲まれるなんて当たり前。ナイフやバットといった、得物を持ち出してくる奴だった。しかし、それは概ね脅しの道具。いざ使うにしても、最後の手段か何かをきっかけにキレた時くらい。そして、そこまで至った奴は、総じて目が血走っている。けれども、この少女は違う。

冷めた目で淡々と、そして、確実に、俺を殺そうとしていた。

狂気の沙汰。道路に刻まれた二つの穴が、現実であることを物語っていた。

「な、なんなんだよっ！」

俺はバランスを崩しながら、後ずさりながらも腰を上げ、少女にそう吠える。

なんと、みつともないことが。

立ち上がってみれば、先ほどと変わらぬ、俺の胸ほどにも身長が満たない小さな少女。それに俺は怯えている。

普段、幾人もの不良を相手にし、常に恐れられる側の人間。その俺が、今、目の前の少女に恐怖を覚えている。

「なにそれ。だっさ」

少女はそんな俺を見て、目を細めた。

「何人も喰っておいて、いざ、自分が襲われるとそれなんだ。ホント、野良って、駄目ね」

そう言って、再び彼女のハンマーが振るわれる。大きな獲物だ。威圧感があっても、攻撃の来るタイミングはわかりやすく、重いだけあって、途中で軌道を修正することは難しい。ハンマーは風を切り、その頭に当たる鉄塊は俺の眼前すれすれを掠めていった。

そして、俺は彼女に背を向ける。

俺は、彼女を頭がおかしい子だと決め付けた。警察を呼ぶに値するだけの事象ではあるものの、残念ながら、現在手元に携帯電話はない。けれど、食っただ、なんだと訳のわからない事を言いながら、

ハンマーを振り回す人間と、向かい合うなんて真つ平だった。

走れば逃げ切れる。まず、目測でも50センチ近くの身長があるのだから、歩幅が違う。そして、自分自身、運動神経には昔から自信があつた。更に相手は、あれだけの重荷を引きずっている。まず、逃げ切れるだろう。

女の子に襲われて逃げるなんて、と、笑われるかもしれない。けれども事情が事情だ。体裁なんて気にしている場合ではなかった。

駆け出す。大きな一歩。足の指に力を込めて大地を蹴る。

少し、走れば、コンビニにつく。そこで、警察に話すなりすればいい。仮に追いついてきても、そんな人前で攻撃したりはしないだろう。

サンダルは捨てた。走るのに邪魔だったから。

そして、ある程度走ってから、後ろを振り向く。追ってくる足音はなかった。当然、振り向いた先にも人影はない。けれど、不安は拭いきれない。走るペースは落とさずに、再び前を向く。

「学校ではあんなに、格好良かったのに。期待はずれ」

少女がいた。つい、前に。

身長差のために、前を向いては頭しか見えないほど近く。

次の瞬間には、胸に強い衝撃を感じ、さらに直後には、痛みと共に道路を二、三転。最後には、温いコンクリートへと体を預けていた。

「な、なんで」

再び見上げる形となった。

少女の手にはハンマーが未だ握られている。

擦り剥いたのだろう。頬が、肘が、熱い。

腕立て伏せのように手で、地面を弾いて、身を起こした。少女と向き合うような形で、一步一步を確かめるように後ずさる。そして、何をされたのかと、未だ衝撃の余韻が強く残る胸を押さえた。そして、見る。白いTシャツには彼女のローファアの靴底と同じであるう模様がしっかりと刻まれていた。貰ったのは蹴り。

俺は後ずさり、彼女との距離をとる。

洒落にならない。追いつかれてしまったこともそうだが、蹴りの威力もそうだ。走っていた状態で蹴りが入ったのだから、少女の蹴りでもバランスを崩し転倒ぐらいはする。けれども、数メートルも転がされるなんて、普通じゃない。タツパもある分、俺はそれなりに体重がある。それを蹴り飛ばす程の力が、普通の女の子にしたらって小柄なこの少女のどこにあるというのか。常識破りも甚だしい。

「化け物かよ」

小さく呟く。それが、聞こえたのか、目の前の少女は小さく笑う。しかし、それは、そんな可愛らしいものではなく、風貌とは似つかわしくないような、嘲笑だった。

「お前から、そう呼ばれるなんてね」

少女のハンマーが、再び振るわれる。

俺はそれを避けた。先ほどと同様に、後ろに下がり。追いつかれた。全速力で走ったにも関わらず。逃げるのが適わないと思い知らされた。では、どうするか。

相対するしかない。こんな、凶器と狂気を持った相手に。

もう一撃。それに対し、俺ももう一步下がる。

相手は、一人の少女じゃないか。そう、自分に言い聞かせた。さっき自分がすっ飛んだのだから、偶然いいタイミングでいい位置で当たっただけかもしれない。よくよく、考えれば凶器だってハンマーなんていう大味なものだ。一発振って、第二撃を行うためには振り上げる、振り下ろすという動作が必要になるから、隙も大きい。事実俺はこうして、避けることもできている。

少女のことは何も知らないが、自分だって、散々路地裏喧嘩で修羅場を潜ってきた。そして、ほぼ敗戦はなし。これだけ考えてみれば、真っ向からぶつかって、どちらが勝つかなんて明白だ。

俺は覚悟を決めた。この少女を組み伏せてハンマーを没収して、終わり。そう決めた。

そして、再び、少女の攻撃を避ける。俺は腰を落とし、彼女の懐

へ、と、同時に彼女の足が当たった。側頭部。

今度は、転がるなんてことはなく、完全に宙を舞った。地面へと叩きつけられる。首が抜けたのではないかと、錯覚した。それほどまでに強い威力。タイミングとか、そんなもので、どうこうつく程度じゃない。紛れもない力を、頭へとねじ込まれた。

口の中に鉄の味が広がっていく。脳が揺れたのか、立ちあがることすら、動くことすらできなかった。

足音が響いた。少女だろう。俺へと近づき、足で、うつ伏せに倒れこむ俺を、無理やりひっくりかえす。

「よっわ」

少女は吐き捨てた。

ぐうの音も出ない。完敗もいいところだろう。

死神はもう、目と鼻の先。なんとあっけない最期か。まさか、こんな、訳もわからないまま、殺されるなんて。彼女がハンマーを振り上げたのがわかった。

「じゃあね」

そして、死神の鎌は容赦なく振り下ろされた。

筈だった。一向に訪れない衝撃に俺は瞑っていた臉を持ち上げる。

そこには、ハンマーはなかった。というよりもその姿を遮られていた。視界に移るのは一人の女性の姿。先の襲撃者との対比を差し引いても、十分に高いであろう身長。真っ黒いパンツスーツに、その黒よりもさらに深い色の長い髪の毛を揺らし、彼女は立っていた。本来、俺の頭を叩き砕いていたのであろう、ハンマーをその程居指で押さえつつ。

「真琴さん!？」

先ほどの無表情が嘘のように狼狽する少女。彼女は自身が真琴さんと呼んだ女性から、一歩下がろうとする。が、それがならず一瞬

少女の体がぶれた。真琴さんが抑えるハンマーを引くことができなかったのである。

「亜姫。私の指示は監視だったはずだけど」

そういって、真琴さんはハンマーを彼女の手から引き抜く。同時に少女、亜姫もそちらへと少し引きずられた。

どれほどの力なのだろうか。そもそも、亜姫の怪力は先の出来事でわかっていた。異常に速い足。大男一人蹴り飛ばすだけの脚力。そして、相当重であろうハンマーを自由に振り回すだけの腕力。どれをとっても人間離れしていた。その少女から、ハンマーを引き抜くだけの力。

「さて」

真琴さんは、亜姫から奪ったハンマーの柄の部分に持ち帰ると、それを地面へとおろし、俺のほうへと振り返った。

よくよく見るまでも無く美人だった。長く艶やかな長い髪の毛に、つり気味の意志の強そうな瞳。そして、その両目の下には特徴的な泣きぼくろが一つずつ。女に免疫がないとは言わないが、流石に、これだけの美人に顔を近づけられると、身が強張ってしまう。「諏訪部悠君ね」

「え、あ、はいっ」

咄嗟に反応する。そこで始めて、その女性を見て自分が呆けていたことに気がついた。ああ今の俺は余程アホ面かましていたに違いない。

「だっさ」

亜姫の不機嫌な声が妙に心に突き刺さった。

しかし、その亜姫の発言も真琴さんの微笑みによって、一蹴される。その微笑の意味するところはわからないが、それによって、亜姫がたじろぐのだから、其れなりの意味、実績をもったものなのだろう。真琴さんは再び、俺のほうを向き、口を開く。

「さて、君にはまず、謝罪を。それから、お願いをしなければならぬ」





#### 【四・逸脱者・out of standard・】

#### 【四・逸脱者・out of standard・】

到着したのは近所でも有名な廃墟。

元々は金持ちの屋敷だったとかそうじゃないとか。俺がここに引っ越してきたときにはすでに、家主がおらず、周辺の子供たちがお化け屋敷だなんだと言っていたのを記憶している。普段であれば、明かりなどは無い。けれど、この日は屋敷の前に数台のパトカーと一台の黒いワゴン止まっており、幽霊屋敷は喧騒に包まれていた。

少女は、なんの躊躇もなしにパトカーの合間を縫って、最短距離で、黒いワゴンに向かい、その扉へ開く。真つ黒いワゴン。側面には白い文字でASO警備保障と書かれていた。

亜姫と真琴さんがワゴンの中に消えていくのをぼんやりと眺めていると、少女のものだろう、白く細い腕が俺の右腕を掴み、女とは思えないような力で、俺を車内へと引きずり込んだ。

「状況は？」

真琴さんは言う。

黒いワゴンの中はまるで何かのオペレーションルームだった。外見よりも広い社内にはいくつかの液晶が並び、一人の男がそれに向かって座っている。そして、その後ろから、真琴さんが液晶を覗き込む。

「とりあえず、警察の現場検証待ち。監視カメラの映像は本部から届いてるよ。」

男が真琴さんの問いに答える。それから、液晶を指差して、亜姫に見るように促した。

「これが、つい十五分前だね」

亜姫は液晶へと顔を近づける。暗かったものの、液晶から放たれる光で亜姫の表情がわかった。ここからでは見ることは適わないし、音声があるわけでもないの、何が映っているか知ることはできない。けれども、さぞや、見ていて気分が悪いものなのだろう。顔を顰めるとすぐに、視線を液晶からはずしてしまった。

「本当に十五分前ですか？」

亜姫が尋ねる。

「ええ、そうよ」

今度は、腰を折って液晶を覗き込んでいた真琴さんが頷いた。

その答えに亜姫はいぶかしむ。

「そんなありません。だって、諏訪部悠はその時間、私といましたから。」

そこで、男が、俺の方を向いた亜姫の視線を追って、俺を見た。

男は驚いたように口をあける。

「そうね。危うく、大切な参考人を殺すところだったわ」

その言葉に亜姫は罰が悪そうにうつむく。

「とはいえ」

真琴さんは彼女の報告を聞き、眉をひそめる。

「本人に、見てもらうのが早いでしょうね。結果は見え透いているけれど」

真琴さんは俺に画面を見るようにと促した。

「あ、ああ」

俺は言われるまま、画面のほうへと顔を近づける。

「いいかい？」

男が確認をとった。

暗い画面。恐らくは観る準備ができたのか、ということだろう。

俺はその男の問いに小さく頷く。

男の操作により、映像の再生が始まった。それは屋内のもの。暗視カメラと言うのだろうか、暗い箇所を無理に映し出したような画面、時折テレビなどで放映される監視カメラの映像のような荒い画

質。それでも、そこが自分の知らない場所であることくらいは理解できた。

「その屋敷の映像。多分三十分くらい前かな」  
隣で映像に関しての補足説明が入る。

数分の間、映像に変化はなかった。ただ、廃墟の暗い部屋が映し出されているだけ。が、不意にカメラの端で何かが動く。

金髪の、男、か？ それもかなり大きな。それが、何かを引きずって画面中央に移動してくる。よく目を凝らして気がついた。男が引きずってきたのは人。意識を失っているのか、まったく動く気配もない女性、着ているものからして高校生だろう。男は女性を壁に持たれ掛けさせた。そして、男ははつきりとこちらを見る。そして笑った。その顔は見覚えのある、なんていうレベルではない。

「っ！」

俺は驚きを隠すこともできず、しかし、その驚きは声にもならなかった。

画面で見たその男の顔はまさしく俺。というよりも、顔だけではない。背格好も髪の毛も。画面の中に立っている男はまさしく俺だった。

そして、その驚きも冷めやらぬ内、俺は視線を逸らすこととなる。観てられなかった。画面の中の俺の所業を。画質が荒いから、そう見えるだけ。そう信じたかった。

画面の中。俺はカメラから、女性へと向き直ると、屈み、首あたりへと顔を近づける。その直後、女性は暴れだした。しかし、金髪の後頭部は女性の首元からぶれることはない。ただ、小さく揺れるのみ。女性の動きは激しくなる。が、ある一時を境に、それも徐々に弱くなっていき、女性を中心に真っ黒いシミが床へと広がっていた。そこで、気がつく。これは、食事風景なのだ。

男の頭が首から肩へと進んでいく内、俺は画面を見続けることを諦めた。観ていられず、俺は画面から顔を離して、後ずさり壁へと体重を預ける。

「な、なんだ、これ」

画面の中の俺は人を、食べていた。真実とは到底思えない光景。そんな話があったというのは時折耳にすることはあったが、そんなもんは映画の中くらいのもんだと思っていた。レクター教授じゃあるまいし。ただ、現実だと言われ、見せ付けられたそれは、ただただ気分が悪くなるようなものだった。

「大丈夫？ 本当に知らなかったのね」

いつの間にか、目の前に背の高い方の女が立っている。彼女は俺の肩を掴んで、長いすへと誘導し座らせた。

少しでも気持ち落ちつかせるように深く深呼吸をする。

「さて、どこから説明しようかしら」

再び彼女は口を開いた。どうやら、俺の相手は彼女に決まったらしい。俺を殺そうとした張本人と、先ほどまで俺に映像を見せていた男は、二人して何かを話していた。

「あれね、今回だけじゃないの。もう何年も、何回も、何人も、同じような事件に関わっている」

「え？」

それは思いもよらぬ内容。

そして、その発言を聞き亜姫はその続きを遮ろうとする。が、男にそれを制されてしまう。

「いや、あれ、見せて隠す意味ないでしょうよ」

と。真琴さんは、その様子を気にすることもなく言葉を続けた。

「貴方は、ビューティフル・ドリーマー、通称BDって呼ばれる新型のドラッグがあるのはご存知かしら？」

「いや、知らない」

聞いたこともない。こんなナリしているものの、その手のものには興味がなかった。それに、あまり誰かとするむ事がなかったし、そういうものに触れる機会もなかったから、知識もあまりない。精々、中学のときにあった授業で習った程度。

「意外と真面目なのね。まあ、全うに生きていれば、関わるべくも

ないシロモノよ。さて、そのBDは他の薬物とは明らかに性質が違  
うものなの。高揚感も得られない。その代わりね、強く願えば夢を  
叶えてくれるの」

そんなものがありうるのか。正直、馬鹿馬鹿しいと思った。が、  
真琴さんの表情は至って真面目であり、それが悪ふざけや冗談で言  
っているようには思えない。何よりも先の出来事を経験し、映像を  
見た今となっては、どんな突拍子もない話でも信じられるような気  
もしていた。しかし、疑問は残る。

「夢なんて、人それぞれだろ。それをなんでも叶えてくれるのか？」

「ええ、そうよ」

即答。

「けれど、その叶え方は期待通りとは限らないわ。BDを摂取する  
と、一つだけ各々の夢を叶えるのに最適な超能力、それと、異常な  
身体能力を与えてくれるのよ」

「超能力？」

前言撤回だ。流石に超能力というのは、飛躍しすぎているような  
気がする。身体能力に関しては先に亜姫に襲われたのを見ていれば  
わかるが。そこで、ふと、亜姫の方を見る。ということだ。彼女  
はBDを摂取したことになるのではないだろうか。真琴さんの言う  
ことが確かならば、彼女は恩恵に預かっているとみるのが妥当だろ  
う。

「ああ、彼女は例外よ。もちろん私もね」

亜姫の方に視線を向けていたのに気がついたのだろう。真琴さん  
はすぐに俺の考えを否定した。

「この説明は追々していくとして。とりあえず、説明を続けるわね。  
それでね。BDを摂取するとさっきの恩得の他に、ある一つの、そ  
して、最大の問題となる副作用があるの。それが食人衝動」

それが、先の映像の答え。そこまで、聞いてなんとなくではある  
が、事の全容が見えてきた。最初に会ったときに亜姫が「何人も食  
った」というのはそれが原因なのだろう。さっきの映像のようなこ

とが数回あり、俺の姿を見たから俺を殺そうとしたのだ。

「他にもいろいろな、例外や弊害、あるのだけれど概要はそんな感じね。その人ならざる能力と、人を食べる敵性から、私たちは彼らのことを人から外れた者、アウトサイドと呼んでいるわ。そして、そのアウトサイドと呼ばれる化け物を始末するのが私たちの仕事なの」

話しの途中から、予想はしていたものの。

「すみません、ちょっと、急にいろいろ言われたので、まだ、頭の中の処理がおいついてないっす。とりあえず、自分が、そのアウトサイドってのの可能性を疑われて、殺されかけたってことでいいんすかね」

頭をかきながら尋ねる。言ったとおりだ。まだ、頭の中の処理はおいついていない。真琴さんの言うことを疑っているわけではない。ただ、信じる、信じないは別にしても、急に自身の常識を大幅に覆されたのである。動じないわけもない。

「まあ、その件に関しては謝罪しなければならぬけれどね」

「すみません」

亜姫がふてくされた様に言う。どうやら、彼女は真琴さんには頭が上がらないようだ。

「なにせよ。申し訳ないけれど、この件が片付くまでは諏訪部君には迷惑掛けると思うわ。正直なところ疑いも晴れてないのよ。」  
「なっ!?!」

さつき、亜姫との出来事で俺の潔白は証明されたはずじゃなかったのか。

「言ったでしょう? 私たちの相手にしているのは、超能力を持っている化け物なのよ。何がありえるかもわからないのよ。だから、捕まえるまでは申し訳ないけど、あなたは容疑者の一人よ。」

そこまで、言って真琴さんは表情を崩す。

「とりあえず、今日は帰っていいわ。疲れたでしょう。私たちも迷惑掛けたしねっ。」

迷惑掛けたつてレベルじゃないだろう。俺がそう、心の中で毒づくくと、真琴さんはポケットの中から一枚の名刺を取り出した。

？ASO警備システム株式会社 皆川真琴？

そうかかれたシンプルなもの。所属とかは書いていない。ただ、社名と名前のみ。たあ、それだけの情報が記載された名刺。それに真琴さんは胸ポケットから取り出したボールペンで番号を書き出した。

「これ、私の電話番号。聞きたいことがあったり、なんかあれば、気軽に電話してくれていいから」

俺はそれを受け取り、軽く会釈をしてから、ワゴンを降りる。まだ、混乱は解けやらぬが。とりあえずは、家に帰ろう。

コンビニまでアイスを買っただけだったのに。えらく長い外出になってしまった。

【五・閑話之一・1st break・】

【五・閑話之一・1st break・】

チャイムが鳴る終業の合図。それと同時に、とは言わないが、その合図を機に多くの生徒が各々で放課後の活動場所へと散っていく。もちろん俺もご多分に漏れることなく、自身の薄っぺらい鞆を手に教室を後にする。その道中、俺は携帯を眺めていた。ネットの検索機能。検索内容は“BD”それと、忘れてはならないのは“アウトサイド”という化け物。昨日の出来事に関して少しでも知識を得ようとする。しかし、結果は思わしくなかった。いくら調べても望む情報は得られない。所詮は携帯電話で、調べるのは無理があったのだろう。

結局、BDに関してもアウトサイドに関しても、そんなものは、ありません、とでも言わんばかりに何の情報も得られなかった。実際、被害者も出ているのだから、世間的に問題になってもおかしくないだろうに。

「最近通り魔殺人とか増えているらしいから、気をつけた方がいいよ」

と、間延びした喋り。隣を歩きながら啓太が言った。

所詮、皆、この程度の認識なのである。俺はまるで、狐にでも化かされたのではないか、とすら思う。が、ポケットに入っている紙切れが昨日の出来事が真実であると主張し続けている。

さて、俺はこれがどうなるのか。早いところ真犯人が見つかってくれないことには、自分の心配で胃に穴が開きそうだ。

俺は大きな溜息をついた。



「どしたの？」

下駄箱。上履きからローファーへと履き替ええる最中に訪ねられる。それ程浮かぬ顔をしていたのだろう。まあ、普段から愉快的な顔をしているつもりもないが。

「って、よりはさつきから溜息もれまくっているよ？ あんま、人の話も聞いていないようだし」

そうだったのか。確かに、ずっと、昨日のことが頭の中で巡ってはいるけれども。

「ああ、大丈夫」

しかし、その答えも、すぐに撤回したくなった。

「諏訪部君」

聞き覚えのある声。俺は下駄箱に上履きをしまい終えた、ところで声の主へと向き直る。当然のように昨晚と同じ服装。逆光の中、昇降口の前に立つ、小さなシルエット。女の子にしては短く切られた髪の毛。忘れられるはずも無い。植田亜姫がそこに立っていた。

同じ、学校の制服を着ていたのだから同じ学校なのだろう。それならば、学校で鉢合わせるのも当然と言える。しかし、彼女はどうか見たって、そこで待っていた。そして、彼女は言う。

「一緒に帰りましょ」

すかさず俺は、昨晚携帯に登録していた真琴さんの電話番号を示させた。

【六・和解 - boy meets girl -】

【六・和解 - boy meets girl -】

「なんだ、この状況」

俺は、シンクで食器を濯ぎながら、溜息をつく。

水の流れる音。俺の背のリビングからは、楽しそうな話し声が聞こえる。なんで、こんなことになっているのか。

我が家は兄と二人暮らしだ。俺は言うまでもなく、兄もこの家に友人を連れてくることもあまりないので、そうそう、俺と兄以外が家にいることはない。稀に啓太が遊びにくるくらい。俺の記憶している限り同世代の女が、この家の敷居を跨ぐのは初めてだ。

「いやあ、こんな男臭い、部屋でよければ、好きに使ってくれ！」

まさか、悠にこんな可愛い彼女がいたとはなあ」

「いえいえ、可愛いだなんて」

兄の言葉に侵略者、植田亜姫はそう言うてはにかんでみせる。俺への態度とはえらい違いだ。そうして、兄貴も兄貴で簡単に懐柔されてんじゃねえ。

俺は、キッチンに掛けてあるタオルで手を拭くとリビングで話す二人、を素通りして、自室へと向かった。

なんで、こんなことになっているのか。なってしまったのか。

放課後、植田は、何の前触れもなく、俺との帰宅を強行した。どうやら、啓太は気を使ったらしく、植田の同行を知り、用事があるからと先に帰ってしまう。そして、止む無く俺は植田と二人、まったく口を聞く事もなく自宅へとたどり着いた。

「じゃあな」

そう言うて俺は自宅前まで着いて来た植田と、別れるはずだった。

けれども、植田はそんな素振りをみせることなく、あるうことが、俺と一緒に、玄関の自動ドアをすり抜けて着てしまった。

「言ってなかったけ？ 今日からあんたの家に世話になるつもりだったんけど」

「はあっ!？」

俺は驚きを隠すこともなく、その声を上げた。思ったよりも声が大きかったらしく、自身の声が反響する。幸い、周囲に人はおらず、目立つようなこともなかったが。

「いや、意味わからねえし」

俺は、声のトーンを落とすつつも植田を睨む。けれども、植田はそれを気にする様子も無かった。

「仕方ないでしょ。あんたの疑いは晴れてないんだから、あんたの監視を続けなきゃいけない。もう、どうせバレてるし、あんたの家に居たほうが監視も楽じゃん。外で待機してるのって、熱いしなかなかつらいんだよ?」

「馬鹿言うな。そんなん通るわけないねえだろ。それに、うちは、俺と兄貴の二人暮らしだから、女泊まらせらんねえよ」

「なんで。襲っちゃうから?」

「んな訳ねえだろ。常識考えろよ。それに兄貴だって、そんな許してくれねえ」

はずだった。

帰宅して、兄貴と顔を合わせた、植田は、昨日から今までで一度だつて見たことの無い、予想することも出来なかった程の笑顔。そりゃあもう、愛想のいい表情だった。

「はじめましてっ。悠君とお付き合いさせていただいております、植田亜姫と言います」

そこから、兄貴に取り入るまでは一瞬だった。まんまと、我が家へ上がりこんだ植田は、俺の彼女と自称し、自宅が全焼しちゃったからお世話に、少しの間、お世話になりたい、と嘘を並べ立て、見事兄貴の許可を得たのである。あまつさえ、夕食も三人分用意させ

られた。ちなみに、植田が兄に、ないことないこと喋っている間、当然、俺はその否定を行おうとした。が、口を開こうとするたびに、奴の怪力が俺の二の腕を引き千切らんばかりに、つねってきたので結局、俺が植田の家庭侵略を妨げることはできなかつた。

そして、現在に至るのである。

俺は、部屋着に着替え、ベッドに寝転ぶ。と、突然、乱暴に扉が蹴り開けられた。来訪者は言うまでもない。兄貴はこんな乱暴に扉を開けたりはしない。

「蹴るなよ。それに、ノックぐらいしろ」

ベッドに横になったまま。植田の方を向くことなく言った。

「お兄さん、仕事行つたよ」

天晴れな無視っぷりだ。そう言うと、部屋に入り、片隅に自身の荷物を置く。容赦なく下敷きにされる俺の雑誌。それほど部屋が片付いているわけではないが、鞆を置く場所くらい、いくらでもあるだろうに、なんで、わざわざ、そんな風に置くのか。どうせ、口にしたところで、奴の機嫌を損ねるだけなのだから、あえて口にはしない。

植田はぐるりと部屋を見回してから、ゆっくりと、その場に腰を下ろす。スカートの後ろ部分を、押さえながら座るその仕草が、女の子っぽくてらしくなかつた。

「暑い」

植田はそう呟く。

それは、そうだろう。俺だって汗だくだ。リビングにいれば、窓がある分、幾分涼しいのだろうけど、この部屋は、熱気がこもり過ぎている。俺は、たとえ暑くても落ち着くし、何より、植田が、ないから、自室に来たというのに。なぜ、彼女がここに来のか。

「リビングに行つて窓開ければ、涼しいと思うぞ」

暗に出て行くように訴える。自分の部屋に人が、それも女がいるというのとはとても落ち着かない。その相手も相手だ。

「だって、人の家で一人つても落ち着かないでしょ」

どうやら、俺の気持ちは伝わらなかったらしい。

「それに、あんたを監視するためにここに居るんだから、違う部屋にいたら意味ないじゃん」

「俺の部屋には、窓ないから、リビングにいれば、外出するときわかるだろ」

「あんたがアウトサイドだったら、どんな能力があるかわからないからね。こうやって、監視してるのが一番でしょ」

どうやら、俺は、あの映像の男が捕まるまでは、こいつに付きまとわれなければならないらしい。まあ、寝てる時とか、どうするつもりかは、わかりかねるけどな。それに学校でだって学年が違うから教室のあるフロアすら違うつてのに。

とはいえ。流石に、狭い部屋に二人、汗を流しながら我慢大会していても仕方が無い。

「わかったよ。それじゃあ、俺もリビングに行くから」

俺は、ベッドから、起き上がり、リビングへと向かった。植田も、だるそうにはあるが「はい」と、返事をする。小さいマンションだ。部屋を出れば、すぐリビングだ。植田は、先ほどまで、座っていたの時と同様にちゃぶ台の前に腰を下ろす。俺はというと、喉が渴いたので、キッチンまで足を伸ばし、グラスに麦茶を注いで、その場で飲み干した。そして、再び、グラスに麦茶を注ぎ、今度はもう一つグラスを用意しそちらにもグラスを注いだ。よく冷えている。グラスもすぐに汗をかけた。俺は、その二つのグラスを持って、ちゃぶ台の前まで行く。一つを植田の前に、一つを自身の前に置き、俺も腰を下ろした。テレビのリモコンを操作し、電源を入れる。特に、内容には興味がなかったので、点けたときにやっていた情報番組をそのまま流す。最近、よく見かける芸人がラーメンを食べていた。

「気が利くじゃん。ヤンキーのくせに」

麦茶を半分ほど一気に飲んで植田が言う。

「ヤンキーは余計だろ」

「じゃあ、不良だな。金髪でピアスあけてて、喧嘩っ早い高校生をそれ以外で形容する方法を私は知らない」

そう言っつて、再び、麦茶に口を付ける。そんなに、喉が渴いていたのだらうか。

「気が利くことと、ヤンキーになんの関係性もねえって話した。」

俺は、そう言っつて頬杖をつく。

「そっか」

そう言っつて、植田も、麦茶からテレビへと視線を移した。

「にしても、また、えらくぶっ飛んでんな。監視のためにお泊りですか」

視線も向けず、頬杖はついたまま。テレビは見ているものの特に内容に気を向けているわけではなかった、ただ、なんとなく気を紛らわすために点けているだけだ。

「なんか、その言い方気持ち悪。」

「うっせ」

時折、麦茶を口に運ぶ。喉を抜けるよく冷えた、それは火照った体を覚ますには丁度いい。時折、窓から吹き込む風も、汗を冷やしてくれて心地いい。まあ、快適。

それから、僅かな沈黙があった。テレビの場面は切り替わり、スタジオで、また同じように芸人たちがあれこれ喋っている。部屋に響くのは、スピーカーから、垂れ流されるその音声ばかり。

「昨日は、ごめん」

それは、唐突に割いて放たれた言葉。そこで、俺は、言葉の意味を反芻して植田を方へと顔を向けた。そこで、植田が、いつの間にかこちらへと向き直っているのに気がつく。

「謝っつてすむとは、思わないけどさ」

発せられたのは謝罪だった。

「ただ、まあ、これは、私の自己満足なんだけど、どうしても謝りたくて」

その大きな瞳がまっすぐに俺を見据えている。ひねくれていて、

まったくもって何を考えているのかよくわからない奴だと思っ  
た。けれども、それはもう、真っ直ぐに俺の目を見ている。

「もついいよ。死んでもねえし、大した怪我也ねえしな」

「でも」

「気にしてねえよ。」

言葉を遮った。本人が反省しているならいいだろう。それに止む  
を得ない事情つちゃ、そんなような気もする。許さないことで何か  
があるわけでもない。だったら、ここですっきりさせといた方がお  
互いのためだろう。ましてや、昨晚の映像だ。あんなん、誰が見た  
つて、俺が犯人だろ。

「そう。ありがとう」

彼女は、それまでの行動が嘘だったかのように、しおらしく、小  
さく呟いた。そして、大きく一つ伸びをすると、勢いよく立ち上が  
る。

「どうした？」

俺は尋ねる。彼女は、俺の部屋の扉を開けて鞆を引きずり出す。

「いやさ、そろそろいい時間だしね。寝る用意も兼ねて風呂借りる  
わ！」

「お、おう」

急にどうしたというのか。妙に元気よく、風呂場へと向かう彼女は  
俺は麦茶を片手に見送った。

【七・閑話之二 - Bathroom -】

【七・閑話之二 - Bathroom -】

先ほどまで、自分が袖を通していた衣類を鞆の中に投げ捨て、お風呂場の扉を開く。一瞬、足を付けたタイルの冷たさにたじろぐものの、意を決して風呂場へと立ち入った。

灰色のタイル。湯船はそこそこ大きくて、湯船の正面には、温度調節などをするためのコントロールパネルが設けられている。

いいところ住んでるなあ。

と、心の中で呟く。自身の住んでいるASO警備保障の女子寮とは大違いだった。会社自体は大きく、寮自体も綺麗なのだけれど、残念ながらユニットバスで、湯船につかることはできない。ましてこんなコントロールパネルなんてついていなかった。地味に、その点はうらやましく思った。

シャワーヘッドを握り、お湯を出す。それ程、時間が掛かることなく、水温は適度な温かさになった。それを確認し、お湯を頭から浴びる。お湯は心地よく、短い髪を伝い、体の汗を洗い流してくれた。

なんで、こんなとこにいるのか。

人の家で風呂を借りているにも関わらず、置いてあるシャンプーに不満を覚えながら、過去を思い出す。昨晚の出来事を。

結局あの晩、私は真琴さんにひどく叱られた。今思えば、当然といえば当然。まさか、諏訪部が当事者でじゃないなんて思ってもみなかったけど。けれども、諏訪部が事件に関わりがないという訳ではないので、監視は続けなければならなかった。かといって、大人数を割くわけにはいかないし、いざ、諏訪部がアウトサイドだった



場合、通常の人では一対一で太刀打ちできない。真琴さんは調査から離れられないから、消去法で私にお鉢が回ってきたという。

まあ、当初のように隠れて監視が続けられればよかったのに、バシたら仕方が無いって開き直るのはどうなのか。

それに、普通、男の部屋に女の子放り込むのはどうなのよ。昨晩の戦いで、アウトサイド特有の赤眼症も見受けられなかったし、普通の人が、私をどうにか出来るなんておもわないけど。

「普通の人、か」

十分に泡立ったシャンプーをシャワーで洗い流す。短い髪。人を外れた時から決して伸びることは無い短い髪。髪の毛だけではない。顔も、体も、当然、胸だって。鏡に映る自分の姿は数年前から何一つかわっていない。同級生と並んだって、妹にしか見られることになかった。とはいっても、自分の命を救ってくれたこの血を流れるナノマシンを恨むことなんてできやしないのだけれど。

「さてと」

リンスもボディソープも洗い流して、お湯を止める。風呂から上がり、鞆からバスタオルと着替えを取り出す。

頭にバスタオルを被り、着替えを完了すると、私は脱衣所を出てリビングへと向かった。

【八・続・逸脱者 - out side -】

【八・続・逸脱者 - out side -】

シャワーの音が響く。どうやら、植田がシャワーを浴び始めたらしい。この家で、女がシャワーを浴びるとは思ってもみなかった。が、今は、そんなことは、どうでもいい。多少落ち着かないところもあるものの、入っているのは、ほとんど、中学生か小学生の植田である。昨日、今日会っただけの人間にそれを言うのもいささか失礼な気がしなくもないが。

とりあえず、差し迫った、問題はこの後の身の振り方である。どうやら、彼女は、俺のドツペルゲンガーが見つかるまでは、ここに居座るつもりらしい、口ぶりだった。正直、あの女と一緒に生活をしていくのはなかなか辛い。我俣オーラがヒシヒシと伝わってくる。それに、もう一人の俺の同類らしい。昨晚は、例外だと言われていたし、話しているときは、普通の女の子に見える。けれども、冷静に考えてみれば、昨晚殺されかけたのを思い出せば、自分が彼女に敵わない事は明白だった。昨晚の出来事が、彼女の誤解から起きてしまったことだったとしても、そんな相手が居る中、安眠できるかといわれれば甚だ疑問である。

とりあえず、もう一人の諏訪部悠を捕まえなければならぬ。そうすれば、少なくとも、俺には平穏な日常が帰ってくるはずだ。まあ、普段が平穏かどうかも大概不明だが。とはいえ、安眠できえ、学校行つて、啓太と飯でも食つて。別に、その生活に不満は無かった。それを得るには俺の格好をして好き勝手している化け物をどうにか捕まえるなり、退治するなりするしかない。

テレビに映るのは夜のニュース。政党がどうのとか、首相がどう

のとか。どうやら、昨晚の出来事はニュースになっていないらしい。地元にかかわる事件は放送されていなかった。もしかしたら、他の殺人事件が例のBD関連の事件の可能性ってもないこたあないが。恐らくは、どっかが、何らかの圧力でもかけられ、昨日みたいなニュースが報道されないようにしているのだろう。ネットでも見つからなかったし、確かにあんなのの存在が公になれば、パニックだって起きそうだし。

で。自分なりに奴を探すのには、やっぱり、事件の情報とか、BD、化け物の情報も必要なだろう。それに、中途半端に知ってしまっているのは、もやもやする。どうせならば、しっかりと把握しておきたい。とはいえ、今しがた、普通に情報を集めることができなことがわかったばかりだ。それを知ろうと思ったら、既にそれに関わっている人間に尋ねる他ない。

そして、そう思い立った直後、洗面所の蛇腹が開く音が響いた。植田が風呂から上がったのだらう。湿った足でフローリングを進む。ぺたぺたという足音。そして、彼女はバスタオルを使い片手で頭の水気を拭いながら、再びちゃぶ台の前に腰を下ろした。彼女の寝間着は灰色のスウェットの上下。色気の欠片もねえ。心の中で俺はそう、あきれ返ってしまう。そんな俺のこころを知ってか知らずか、植田は、「牛乳ない？」と尋ねてきた。

「あると思う。冷蔵庫の中」  
「取ってきてー」

予想通り期待はずれの返事。

「嫌だよ。自分で持って来い」  
「それは嫌。人の家の冷蔵庫を勝手に空けるのは気が引けるし、何より面倒くさい」

後半言わなければ、株も下がらなかつたらうに。まあ、何にせよ、これから、話を聞こうというのだ。機嫌はとつとくにこしたことはないだらう。俺は諦めて立ち上がると、先ほどまで、彼女が麦茶を飲んでいたコップを濯いで、彼女の所望する牛乳を、その前へと

差し出した。

「ありがとう」

そう言って、彼女はグラスを両手で持つと、それを傾け、喉を鳴らし始めた。それは、瞬く間に彼女の中へと消えていき、牛乳を飲み干した彼女は「ふはー」と大きく息を吐き、グラスをちゃぶ台の上にと戻す。

「髭、ついてんぞ」

「えっ？」

彼女は袖の部分で慌てて口元を拭った。昨日のことが嘘のように、今の彼女は見た目相応の年齢にしか、見えない。とはいえ、この目お前の少女が自分よりも年上だというのだから、BDの力というのもわからない。彼女の望みというのが子供のままでいたとか、そんなピーターパンのような、可愛いものだったのだろうか。

それは、さておき。

「あのよ。BDやらアウトサイドやらに関して聞きたいんだけど」

彼女のグラスを片付け、俺は話しを切り出した。突然だったので、面食らったのだろう。彼女は、一瞬驚いた様子だったが、すぐに、黙り込み、数秒の間考えこんでしまう。そして、息を一つ吐いた。

「まあ確かに、真琴さんの言うとおり今更、か」

「じゃあ」

「わかった。私の知っている限りのことを話すよ」

そうして、彼女は真剣な表情で語りだす。人を食らう化け物の話し。

「まず、BDについてかな。存在は知ってたよね。昨日、真琴さんが、話していたし。あれの中身については聞いている？」

「いんや」

俺は、首を横に振る。摂取している人間が、どうなるかは聞いた。しかし、その成分やらなにやらは聞いていない。

「あれの中身はある特殊な機械なんだ。十億分の一っていう超極小の」

「ナノマシンってやつか？ SFとかに出てくる」

「正解。かつて、白鳥恭二っていう科学者の開発したナノマシンが、BDの正体」

「白鳥恭二？」

俺は聞き返す。なんとなく、聞いた覚えのあるような名前だったが、詳細が思い出せない。

その俺の質問を聞き植田は「そっか」と小さく頷く。

「白鳥恭二が死んだのは私たちの物心のつく前だしね。当時はすごく、話題になったらしいけど。なんとかっていう宗教団体の施設で、生物兵器を開発していたんだってさ。それで、国が調査を行おうとしたら、そのまま、その施設に籠城。そこで開発されていたのが生物兵器だったとかなんとかで、自衛隊の特殊部隊が出動。で、施設制圧の際に銃撃戦になってその白鳥ってのは死んじゃったんだけどね。その施設から、彼の開発したものが大量に発見されたんだって。生物兵器はもちろんのこと、当時は革新的だったものがいろいろとね。で、その一つがBDの中に入っているナノマシンだったってわけ。」

「なんで、そのナノマシンがドラッグになったんだ？」

植田は小さく首を横に振った。

「わからない。そもそも、押収された時点ではナノマシンがどんな働きをするもののかもわからなかったらしいよ。押収から数年してアウトサイドが出現、その後にアウトサイドを調べていったら、例のナノマシンと同じだったって感じらしい」

「そうなのか」

まあ、今更ながら、本当に映画みたいな話だ。とはいえ、疑うようなこともないけれど。ともかく、そのナノマシンってのがアウトサイドになる効果を持っているってことなんだろう。

「そして、アウトサイドはまあ、概ね真琴さんから聞いていたよね」「まあな」

頷く。

「人を食べる、やたら強い奴のことだろ」

「そう。さつき、話したナノマシンはね、人の肉をエネルギーにして動いているらしいの。厳密にはたんぱく質。ナノマシンは人のたんぱく質にのみ反応して活動するんだって。そして、そのたんぱく質を得るために、ナノマシンが脳に作用して人を食べたいっていう強い感情を与えるんだ」

「また、けつたいなシロモノだな」

「白鳥がそれをわざとナノマシンのシステムに組み込んだのか偶然の結果、そういう風になってしまったのかは、今じゃ知る由もないけどね。まあ、それはいいとして。で、ナノマシンが活発に活動を始めると、ナノマシンの効果によって筋肉のリミッターの解除、新陳代謝の加速とか、様々な力を得られるの。それが、アウトサイドのアウトサイドたる所以。」

「なるほど、だけどさ、超能力つてのはなんなんだ？ 真琴さんは言っていたけどさ。」

なんとなく、なんとなくだけど、これまでの説明は納得のいく気がするナノマシンが、新陳代謝を活性化させて治癒能力を上昇させたり、筋肉のリミッターを解除させたり。これは、体の構造を人為的に歪ませているというので納得は出来る。俺の知る常識の範疇かどうかはさておき。ただし、超能力を使えるようにするってのはいまいち想像がつかない。

「まあ、どんなものかは、人それぞれだけどね。アウトサイドの超能力には二つの分類がある。一つは肉体改造型。もう一つは、純粹超能力型。多くの場合は前者。純粹超能力型は私も見たことない」

「肉体改造型と純粹超能力型？」

「そう。前者は、ナノマシンによって体の形や構造を変化させるもの。常軌を逸していると思うけれども、人によっては、自分の姿をまったく、別の姿に変えることができるよ。多分、今回の事件もこのタイプでしょう。殆どの場合はこの肉体改造型に分離される

そして、もう一つの純粹超能力型は、まあ、世間一般に想像され

る超能力かな。人間が、自身の脳の大部分を使用していないのはしつてる？」

「なんとなく」

そんなことを、テレビか何かで見たことがある気がする。

「ナノマシンは、時に、その脳の未使用部分をこじ開けることがあるの。んで、その未使用部分が開放されるとまったく、思いがけない超能力が使えるようになるらしい」

「らしい？」

俺は彼女の語尾を聞き返す。

「言ったでしょ、みたことないつて。ま、それは、それとして。話を戻すけど、そのアウトサイドを退治するのを国に委託されたのがASOってこと。混乱を招いてしまうからとかで公に出来ないから行政にそれを組織することをお国が嫌がったんだつてさ。そうはいつても、ASOでできた、対アウトサイドの部署にいる人間のほとんどは組織された後にスカウトされてきた人たちばかりらしいけどね。とりあえず、そんな感じかな」

立ち上がり、話を畳もうとする彼女。

「いや、まだ、聞きたいことがある」

それを引き止めて、俺は話の続行を求める。アウトサイドの生態についてか、まあ、どんなもんなのかは理解した。けれど、言ったとおり、聞きたいことはある。

「お前は、本当にアウトサイドなのか？」

大事な質問だ。昨晚、真琴さんと彼女がアウトサイドなのは聞いていたが、真琴さんは、私たちは例外だと言っていた。例外とはどういう意味なのか。

「そつだよ。」

植田は、事も無げに肯定する。しかし、それは同様にある事柄をも肯定することだ。聞いていいのか、逡巡する。けれども、俺の聞いた質問の本質はここにあったのだ。聞かないわけにはいかない。

「でもよ、アウトサイドは人を食べるんだろ」

そう、彼女が昨晚のビデオで見た化け物と、同様の物なのか。

「まあ、そうなりえたかもしれない」

彼女は、一瞬、目を細めた。

「でも、今はありえないよ。言っただでしょ、例外だって。」

彼女はそう言っつて、鞆の中から、小さな薬ケースを取り出す。中には小さなカプセル。食後に、それを飲んでいるのを見た気がする。「これね、ナノマシンの食人衝動を抑える効果があるの。擬似的にナノマシンにエネルギーを与えるんだってさ。ま、一度でも人を食べてしまうと効果はないらしいけどね。私に食べられると思った？」

そう言っつて彼女は悪戯に笑った。そうして、再び鞆の中にケースをしまい、俺の部屋の扉を開く。話は終わったということだろう。

「そろそろ寝ようか。いい時間だし」

そう言われて俺は、時計を確認する。気がつけば、日付が変わろうとしていた。思いのほか、長いこと話し込んでいたらしい。と、不意に気がつく。寝るかと言っつて、何故、彼女が俺の部屋に消えていくのか。

「まさか」

俺は、慌てて立ち上がり、部屋へと入る。

そこで、目に入ってきたのは予想通りのもの。俺が普段寝ているベッドには、すでに、植田が入り込んでいた。タオルケットに巻かれて。

「なんで、お前がそこで、寝てるんだ」

すでに、そっぽを向いて寝る体勢に入っている植田を睨む。てか、髪の毛濡れたまんま、布団に入るんじゃないかねえ、枕に頭を乗っけるんじゃないかねえ。

「じゃあ、どこで寝ろっつ言うのさ。お兄さんのところは流石に申し訳ないでしょ。」

「ソファで寝ろソファで」

我が家のリビングにはちゃぶ台から少し離れた位置にリビングが設置してある。ちゃぶ台で飯を食うにはいささか高いので、テレビ



で映画とか見るとき専用になっているものが。いささか、必要性に疑問は感じるものの、今日まさに活躍する場面が来た。と、いうのに。

「嫌だよ。ベッドじゃないと、寝れないもん。ソファ体痛くなるし。」

「なんとという我俣娘か。」

「ま、暑くても、我慢するよ。思いのほかベッドやわらかいしね」「この子は何様なのだろう。まあ、これの相手をするのも面倒だから、俺自身が動いた方が正解か。」「はあ」と溜息を一つ。俺は仕方なく、部屋から出てソファへと向かう。と、不意に、服の裾を引っ張られ、俺を後ろへと仰け反った。

「なんだよっ」

振り向く。当然、今、この家に居るのは俺と植田の二人だけなのだから、引つ張った相手は彼女しかいない。

「どこに行くの？　ここで寝なさい」

そう言っただけで彼女はベッドの脇の床を指差した。俺に床で寝ると言うのか。

「当然。ベッド一つしかないし、同室じゃなきゃ監視の意味ないし」  
「どんな横暴だ。」

「ぶざけんな」

俺は、そう言っただけで断固拒否の姿勢をとる。流石に、そこまで付き合ってもらえない。俺にだって人権はある。何が悲しくて固い床に寝なきゃならねえのか。絶対に床で寝るなんてことはしたくない。

と、彼女がすぐく、俺の顔を見てくるのがあわかった。じつと。そして、その小さい口が言葉を紡ぐ。

「食つぞ」

俺の決意は物の数秒で瓦解した。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4267t/>

---

『一塵の獣』

2011年6月16日11時10分発行